

思索と言語 (手話という視点)

授業概要

誤解されないようにまず断っておくが、これは手話言語学の授業ではないし、手話そのものを教える授業でもない。手話という視点を通してわれわれの生きている社会を捉え直すための授業である。

手話・ろう・難聴と聞いて、自分には関係のないことだと思ったり、ボランティアの話かと早合点する人は多いだろう。しかし、この問題圏をのぞいてみるならば、みなさんが生きているこの世界の諸問題と通底するものが見えてくるはずだ。とくに、行政・教育・医療などの各方面で仕事をしている人／しようと思っている人にとっては、実は知らないではすまされない問題、自分の専門分野の視点からだけではなかなか理解できない問題がそこにある。本授業では手話という視点を通して、聞こえない人々を取り巻く諸制度、教育、多言語社会、多文化、「障害」の個人モデルと社会モデル、生命倫理などをめぐる問題を考え、議論する。

到達目標

手話が言語であるということの意味と、手話・ろう・難聴が誤解と無知にさらされている実態を理解し、この理解を通して聴者主導の世界のさまざまな問題を考えることを目標とする。

授業計画

授業時間中は以下の流れで授業を進める予定。

北海道大学の教育情報システムであるELMS portalのmoodleを利用して、資料の掲載や毎回の授業アンケートの実施、授業時間外のフォーラムにおける質疑応答、課題提出を行う。受講者は、毎回の授業前にmoodle上の資料を熟読しておくことを求められる。授業中は資料に関する質疑応答や、映像資料の視聴・議論を行う。初回授業では、授業全体のテーマに関わるドキュメンタリーを視聴する予定。

1. 手話が言語であるということの意味
2. 聞こえないということの意味
3. 「障害」とは何か：「障害」の個人モデル、社会モデル、新しい障害学
4. 障害学生と情報保障：合理的配慮について
5. ろう教育をめぐる問題
6. 医療をめぐる問題
7. 最終筆記試験

成績評価

平常点（授業中の議論への参加状況、moodle上の資料の閲覧状況、授業アンケートへの回答、数回課す予定の小さな課題による、30%）と最終試験（70%）によって評価する。ただし、出席回数が全授業数の3分の2に満たない受講者は不合格とする。詳細は初回授業で説明する。